

山中燦子著「夢ある未来へ - 人間の安全保障 - 」を読む

- 人間の安全保障と教育を考える -

教育こそ「人間の安全保障」

本書では「人間の安全保障」の視点に立ち、「人間の安全保障」として認識されるようになった非伝統的な安全保障とはどのようなもので、日本とどうかかわり、どう未来を切り開いていけるのかを第一章で、伝統的な国家の安全保障が「人間の安全保障」の理念によってどう変わってきているのかを第二章で、見てきました。

大枠としての「人間の安全保障」については、ある程度のイメージを持ってもらえたのではないかと思います。

さて、「人間の安全保障」をめぐる重要な問題には、いくつか、まだ取り上げていない問題があります。P.324

中でも、教育、高齢化社会、まちづくり、については、「人間の安全保障」を考える上で、はずすことが出来ません。

しかし、それらの項目については、紙幅の都合もありますので、また別の機会を得て、しっかり論じていきたいと考えています。

ただ、教育、高齢化社会、まちづくりの問題が、どう「人間の安全保障」につながっていくのかという点で疑問を持たれる方もいらっしゃるでしょうから、ここで、「人間の安全保障」から見た教育、高齢化社会、まちづくりについて概観しておこうと思います。

「子供とは人間になりかかっているもの」というイソップの言葉があります。

イソップの言う「人間」は、人間として判断し行動できる存在、すなわち大人を指しているのではないのでしょうか。

子供を育てる、と言いますが、子供は育てば大人になります。

当然のことです。

当然なのですが、その当然の視点が欠けている気がしてなりません。

どういう子育てをすればよいか、するべきか、お受験に対応するにはどうすればよいか、どうすればよい子になるか、などどいった、今日の前にいる子供の問題の解決や、学齢の範囲こころくらいの短い期間での結果を求める切り口でのハウツーは巷間にあふれているのに、その子が30歳、50歳になったときどういう大人になるように育てるか、という視点が欠けているように思うのです。

ここに、「人間の安全保障」が教育と密接にかかわる重要なポイントがあります。

具体的に、三つの方向性から、教育がなぜ「人間の安全保障」そのものなのかを見ておきましょう。

一つは、子供を守るためには、子供を守る大人に子供たちを育てなければ、社会的な危機に対する本質的解決にならないということです。

中長期的に見て安定的な人格と知力を備えることで、一人ひとりの大人が、自分をめぐる危機的な状況にたいしてセイフティ・ネットを張れる人格に育てることで、万が一、モラルに反する利己的な行動に走りたい欲求が生まれても、あるいは子供をあやめたいなどという理不尽な衝動がわいても、自分でその感情を理性的にコントロールできる人格を持つ大人に育てることで。

言い換えれば、被害者を出さない教育現場だけでなく、加害者にしない教育が必要なのです。

特に、世界がきわめて緊密化している現代においては、人間も移動する存在であり、思想や思考も素早く伝播します。

国内で取り組みを進めるだけでなく、そうした「大人を育てる」教育を、アジア、ひいては世界全体に発信し、国際協力の下で発展させていくことで、世界的な教育のクオリティを確保していくことが必要になってきています。

二つめは、「人間の安全保障」を社会全体が実現していくためには、未来の安全を確保するために今行動する発想や、自分だけでなく他者や社会全体、世界全体の安全を協力して確立していこうとする発想を子供のうちから養わなければならないということです。

動物の多くは、過去や未来について考えることができません。

しかし、環境問題をはじめとする様々な地球規模の危機を考えると、現代社会に生きる我々は、単に明日明後日というレベルではなく、50年、100年といった長いスパンで考える力を持たなければならないのです。それは、生得的な力ではなく、考える教育によって実現される力です。

つまり、教育を知識重視から知力重視へ、結果重視から考え方の枠組み重視へとシフトしなければならない、ということです。

それは、単に社会の未来にとってプラスとなるだけではありません。

他者との対立を基軸にするのではなく、協力による共生を目指す温かい思考、中長期的な視野による長いスパンで物事を考える力、予防的な発想によるセイフティ・ネットを持つことで可能になるポジティブな計画性、複数の問題を立体的、有機的に組み合わせる思考...「人間の安全保障」が要求する世界観をしっかりと身につけることは、その個人個人にとっても、人生の強力なツールとなるはずで

す。中長期的な視野でものを考える力を持つ人間、他者を思いやり、社会全体や世界全体について思いをめぐらせ、協力し合って行動できる人間、さらに、人間が活動していくための枠組みである自然との共生を日常的な思考のパタンにもつ人間へと育てる教育への根本的な転換が求められているのです。

三つめは、初等教育の重要性です。

国連人間の安全保障委員会の共同議長アマルティア・セン氏は、『人間の安全保障』と題する著書の冒頭二章を教育問題に割り、「不利益をこうむるリスク」の排除に教育が貢献できる度合いに「人間の安全保障」が直接かかわってくる、と指摘した上で、基礎教育が「人間の安全保障」の中心的な概念となる理由を列挙しています。

その理由として、読み書きや計算ができないとそれだけで不安を増大させ生活を脅かす、権利を理解できず行使できない、政治的な発言力を失わせる、といった理由が並んでいます。

初等教育が、個人にとってその人の人生と生活を守るためにいかに重要かということと、ある一定以上のクオリティを担保した初等教育が地域全体、国際社会全体に行き渡るかどうか、国際社会全体の安定にきわめて重要な意味を持つことを無視するわけにはいきません。

たとえば、ある民主主義の国において、そこに暮らす人々の大半が、基本的人権を理解できず行使できない、政治的な問題も理解できず発言力がない、そもそも何が起きているのやら文字も読めないのわからない、となると、その国は民主主義制度とは名ばかりの独裁主義国家や全体主義国家になってしまいかねません。

そして、そうした国が一つでも地域にあれば、その地域の安全保障が脅かされることは間違いありません。

日本国憲法は国民の三大義務の一つとして「教育を受けさせる義務」を掲げています。

そのことの大切さが、個人の生活を守ることと社会の安定を守ることの両方にあるのは明らかです。

また、日本をはじめとする先進国が、ユニセフや ODA(政府開発援助)等を通じて多くの発展途上

国に校舎や教科書、文房具などの教育インフラを提供してきた理由もここににあります。

初等教育を国際社会全体に行き渡らせることは、「人間の安全保障」を実現していく上で、きわめて重要なファクターなのです。

日本では9割以上の大人が、自分の子供の頃と比較すると、今の子供は「恵まれている」と感じているようです。

その一方で、礼儀正しさ、基本的な生活習慣を身につける、根気強さ、公共心がある、体力があるなどという項目では、現在の方が劣化している、と判断しているそうです。

人間としての社会生活の基本である、思いやり、信念、配慮、責任感、愛情、勇気といった大切な部分がきちんと身につかず^{はたん}に育ってしまう人格破綻の人間が急増しつつある現状は、本当に日本の危機だと憂慮します。

戦後の日本の教育について振り返ったとき、「教(知識を教える)」は成功したかもしれませんが、残念ながら「育(心をはぐくむ)」が成功しているとはいえません。

一人の人間として、日本人としての誇りと謙虚さを兼ね備え、知識を包含する知力、すなわち、バランスの取れた意志と判断力のある日本人を育てることは、今の大人、つまり私たちに課された大きな責任です。

もっとも、見方を変えれば、これからの日本人を再び誇りと謙虚さを兼ね備えた大人に育てていくシステムを創るチャンスはまだ残されている、とも言えるでしょう。

今こそ、変革の時なのです。

先日亡くなったハーバード大学のガルブレイス教授が、1994年にお会いした時に、「アキコ、日本とアメリカは素晴らしい製品を生産するのには大成功した。しかし、真の幸せな人々(HAPPY PEOPLE)を生み出すのに成功したかどうかは疑問だよ」

とおっしゃった言葉は、いまでも、耳に残っています。

社会全体のクオリティ・オブ・ライフを高め、日本人として生を受けた赤ん坊が、日本人として生まれてきてよかったと思えるような人生を歩める国にしていくために、そして、この国に暮らす一人ひとりが、目先のことや自分たちだけの小さな利益ではなく、社会や、世界や、地球全体のことを、自分たちの日々の暮らしとつなげて考えることの出来る、温かい思考の出来る国へとしていくために、教育の質的な変革が求められています。

そしてそのためには、なによりもまず、改めて、私たち大人全員が、「子供」という人類の未来を、両手でしっかり引き受ける気持ちを持たなければなりません。

教育こそ、「人間の安全保障」なのです。P.332

山中燦子著

「夢ある未来へ - 人間の安全保障 - 」角川学芸出版、角川書店 2006年9月1日刊

- 2006年9月4日記 -